

## ひとつのことが足りていれば

今朝の半田教会の朝礼拝は、いつもとは少し違う礼拝の形となっています。それは金曜日に召されたわたしたちの愛する川口美智子姉妹の棺が第二礼拝室に安置されているからです。昨日午後棺に納めて今の形としましたが、おとといまでは会堂のほうに頭を向けていました。これは別に北枕にしたということではなくて、玄関から入ってきた人の視点が自然に向くほうを考えてそちらにしていたのです。しかし、棺に納めてからは頭の向きを正反対にしました。礼拝のためです。つまりわたしたちは座って講壇の方を向いて礼拝を捧げる、神を賛美し、神の言葉に応答する姿勢を取っているわけですが、姉妹もこうして棺に横たわった姿で礼拝に臨む姿勢を取っている。それは復活節のときに読まれる招きの言葉「眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる」という御言葉に示されるように、わたしたちに与えられている復活の希望を体現している。午後の葬儀のためということもできますが、今回あまりに早く終わった姉妹の闘病生活、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言発出中でお見舞いにも行けず、もどかしい思いに臍を噛んだ日々をへて、こうして主による安息に入られた姉妹とともに礼拝を守ることが許されたのは神の恵みによる計らいであると思っております。

さて、今朝、与えられているフィリピの信徒への手紙はパウロがフィリピの人たちに贈り物への感謝を綴っている箇所です。この手紙の執筆の動機はひとつには贈り物への感謝、彼らの志、心尽くしの贈り物にお礼状を書いて応えているわけですが。ただパウロはこのよい教育の機会を逃しません。物欲しさで言っているではありません、わたしは自分の置かれた境遇に満足す

ることを習い覚えているのです、と告げて、キリスト者を活かす秘密について語ります。わたしはいついかなる場合でも対処する秘訣を授かっている。わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能ですという言葉はクリスチャンならではの不思議な生き方を指し示しているように思えてなりません。このたび召された川口美智子さんの生き様からも、このパウロが語っている教えが浮かび上がるように思います。今回、リビングウィルに美智子さんはふたつの聖句を愛唱として選んでおられました。ふたつともパウロの書いた手紙からの言葉です。そのうちのひとつを紹介しますと、テサロニケの信徒への手紙第一章から「いつも喜んでいなさい」という御言葉でした。この手紙でもパウロが繰り返して信徒たちに勧めている言葉ですね。それはパウロが、喜ぶことの出来る根拠として、わたしの救い主、キリスト・イエスと出会い、捉えられ、この方の語る福音によって人格と人生を形作って新しい存在とされたからです。それは何か薬を飲んだら頭痛が止んだとか、髪の毛を明るい色に染めたといったような即席のものではなくて、みずからの弱さやつまづき、苦難や悲しみを通して福音の力を知る、弱さの中に働く十字架のキリストの力をゆっくりと染み込ませていったということでしょう。「我弱くとも恐れはあらず」という真実に心の底からアーメンと唱和するまでに打ち砕かれてゆく。そこまで低くされ、御言葉の慰めを味わったからこそ、パウロも、わたしはいかなる境遇にも満足する術を習い覚えたということが出来た。わたしを強めてくださる方のお陰で、つまりわたしの裁き主であり、救い主であり、贖い主であるキリスト・イエスのお陰ですべてが可能なのです、ということが出来た。いま牢獄のなかにおいて不自由な生活、肉体的にも非常に劣悪な状況が想像される監獄の中からも愚痴や嘆きではなく、讚

美と喜びと感謝を信徒たちに向かって発信することができた。それは「わたしの主イエス・キリストを知ることのあまりの素晴らしさに他の一切のことを損失とみなすようになった」という発言からも伺えます。ウイスキーやワインには樽に貯蔵して寝かせておく熟成という期間が必要ですが、おなじようにキリスト者も苦難をへて御言葉に支えられる体験をする。自分が頼りになると思っていた神ならざるすべてのものが取り去られて行き、ただ神の言葉だけが慰めと平安を与える力であることを認めることを繰り返して、パウロはパウロになった。それはキリスト者となったものがすべてたどる道であるとわたしは信じています。誰も一朝一夕で信仰者になったものはいないのです。与えられた御言葉と格闘し、この盃なのですかと身悶えし、自分を神さまに明け渡すことを学びながら信仰者となってきた。インスタントな信仰者はありません。そして、わたしたちを御言葉に信頼して生きるものへと変えてゆくのは苦しみであり、悲しみであり、与えられた自分自身の課題なのです。その最大のものが死です。自分の存在に関わる問題をとおして、初めてわたしたちは切実に求める。問わずにはいられない。祈らずにはおられなくなる。人生でわたしたちが祈りに向かう時は、病氣、挫折、罪に落ちた時、そして死を予感した時でしょう。そうした苦しみの中で、わたしたちは自分の問題として苦しみ、研ぎ澄まされてゆくのです。ここまで手紙を書き継いできたパウロはすでに裁判の結果の死を、あるいは劣悪な環境の牢獄で死を迎える覚悟をしていたと研究者たちはみています。しかしその状況でもすでにこの手紙を書き始めてすぐのところに「わたしにとって生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。けれども肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。この二つのこ

との間で板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。だが他方では、肉に留まる方が、あなたがたのためにもっと必要です」と述べています。パウロにとって死は終わりではありません。復活が彼の希望です。死は終わりではなく、眠りに変えられており、死者の中から復活された救い主と結び合わされていることによって、死の彼方を望み見ることが許されている。ここです。今日の説教題は「ひとつのことが足りていれば」としましたが、まさしくパウロはこのことが足りていたから、このように生かされた。わたしにとって生きるとはキリストであり、死ぬことも益なのです、とすることが出来た。救い主キリスト、この方に留まる。この方に目を留める。この方がわたしのために成し遂げてくださった十字架の救いと復活の希望の消息に身を添わせ続ける。重心をキリストに移す。このひとつのことが足りていたから、すべてのことを神に委ねることが出来た。人間の行きつく先にある死も、主に結ばれて迎えるならば命につながるのだと確信している。このことが足りていれば、すべてはよいのです。このパウロの確信を世々の信仰者たちも自分の慰めとするために様々な工夫をしてまいりました。今日は最後にハイデルベルク信仰問答 第一問 唯一の慰めを朗読して、祈ります。

問1：生きている時も、死ぬ時も、あなたのただ一つの慰めは、何ですか。

答 わたしが、身も魂も、生きている時も、死ぬ時も、わたしのものではなく、わたしの真実なる救い主イエス・キリストのものであることであります。

この方は、ご自分の尊い血で、わたしのすべての罪を完全に支払ってくださり、わたしを悪魔のあらゆる支配力から解いて

くださいました。あの方がわたしを守られるので、わたしの天の父の意志がなければわたしの髪の毛の一本でも落ちることはなく、すべてのことがわたしの救いのために必ず益となるに違いありません。またこの御方は聖霊によって、わたしに永遠の命を確信させてくださり、これから先は、わたしがキリストを目指して生きることを喜ぶように備えてくださるのです。

わたしはキリスト・イエスのものとされている。それほどまでに神に愛されている。この神の真実が揺るがないことを知ることが、わたしたちキリスト者の慰めであり、励ましです。これによってすべてが足るのです。

お祈りいたします。